

蔵出しお宝ニュース

— 第 35 号 —

三原市歴史民俗資料館では、所蔵資料の本格的な整理・展示のリニューアルに取り組んでいます。本紙では、資料館内で永らく眠っていた三原市ゆかりの貴重な資料の解説と行事の案内・紹介などを随時行って参ります。

「第3回 みはら雛まつり展」1,348名ご来館



平成26年3月1日（土）から3月16日（日）までの16日間、当館1階で「第3回 みはら雛まつり展」を開催しました。

本館1階に江戸時代から現代までの雛人形を中心に展示しました。中でも昭和期に流行した刷物の雛軸や御殿雛をご覧になられた方が「子どもの頃を思い出して懐かしい」とお話されていました。

また、市内で所有されているたくさんの雛人形を特設10段に所狭しと並べた「三原浮城雛」をロビー正面に飾りましたところ、見ごたえがあり、圧巻でした。三原地方で初節句の家に贈られた三原人形の紹介も好評でした。

2日（日）には、着物姿で甘酒のふるまいを資料館前で行いました。大変好評で12時過ぎにはなくなっていました。市内でも「おひなまつり」の諸行事が開催され、甘酒やぜんざいがふるまわれるということで、資料館の甘酒は一工夫してほのかに桃色になるように作りました。天候にも恵まれ、この日は特にご来館が多かったです。

今後も気軽に歴史や文化にふれることのできる資料館づくりに尽力していきたいと思っております。

（左上）ふるまい甘酒の様子

（左下）三原浮城雛



資料館マメ知識 「^{かみしも}袴」とは？



本館所蔵の袴（肩衣部分）



袴は、袴の腰板にも紋所を付けます。

中央図書館ミニ企画

藤原覚一展

と き 平成 26 年 4 月 13 日（日）まで
と ころ 中央図書館 2 階 展示ケース
内 容 三原出身の洋画家・池田快造の
恩師でもあり、戦後本市の郷土文
化研究に大きな功績を残した三
原市立図書館 3 代目館長・藤原覚
一（1895～1990）の文化活動を振
り返り、顕彰します。
油彩画・著作『図説日本の結び』（築地書館）
など

本館常設展示の資料に、三原浅野家の定紋が付いた袴があります。袴は江戸時代以降に用いられた男性正装の一種です。上半身に付ける上衣（^{かたぎぬ}肩衣）と、肩衣と同じ布で作った袴との二部式構成をとっていることから袴と呼ばれ、肩衣袴とも称します。起源は明確ではありませんが、^{すおう}素襖の袖を切って動きやすく簡略化することによって成立したと言われていています。さらに『万葉集』の山上憶良による「貧窮問答歌」の布肩衣に起源を求める説も無視できません。

袴には^{ながかみしも}長袴・^{ほんかみしも}半袴・^{つぎかみしも}継袴があります。長袴は肩衣に、裾を引いて用いる長袴を合わせた構成となっており、將軍をはじめ諸大名や御目見以上の^{おめみえいじょう}上流武家が着用しました。半袴は一般的な袴のことで、袴が足のくるぶしにかかる程度の長さのものです。継袴は、形状の面では半袴と変わりませんが、肩衣と袴がそれぞれ別の生地や色柄を用いたものです。半袴に対する略服という扱いでしたが、江戸時代中期頃から礼服、または武家の出仕服（勤務服）として容認されるようになっていきました。江戸時代後期頃には継袴の袴は、世間に^{せんだいひら}仙台平（縦縞模様）が流行したため、広く使われました。

江戸幕府の衰退とともに、文久 2（1862）年に一時、袴の着用が廃絶しましたが、それはまもなく旧に復し、改めて慶応 3（1867）年 3 月に公の礼服としてその使用が明確に禁止となり、黒紋付羽織袴が正装として確立しました。袴は現在では例祭や節分などで着用されています。

発行 平成 26（2014）年 3 月 28 日

〒723-0015 三原市円一町二丁目 3 番 2 号

三原市歴史民俗資料館

TEL 0848-62-5595

※本冊子に掲載の写真などは、許可なく転用されないようお願い申し上げます。